

刊行によせて

神奈川大学日本常民文化研究所は、戦後間もなく行われた漁業制度資料調査による史・資料 25 万点を含む膨大な資料を所蔵し、また民具研究を中心に長年にわたり「常民」、すなわち庶民の生活文化に関する多方面の調査・研究を行ってきました。その実績が評価され文部科学省の 21 世紀 COE プログラムに採択され、「人類文化研究のための非文字資料の体系化」（2003～2007 年度）の拠点となり、その後、事業は同研究所に付置された非文字資料研究センターに引き継がれています。さらに、2009 年度には国際常民文化研究機構として文部科学省から共同研究拠点に認定され、5 年度にわたる事業を推進することになりました（「平成 21 年度人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」、現「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」）。

機構設立の目的の一つは、日本常民文化研究所の創設者・渋沢敬三（1896～1963）の「ハーモニアス・デヴェロップメント」精神を受け継ぎ、国内・外の研究者コミュニティに広く「常民文化」研究の史・資料と場・機会を提供し、その学際的・国際的展開をはかり、研究分野を拡大、深化させることにあります。そのために、当該学界・研究者コミュニティの意見の反映をはかり学外の研究者が過半数を占める運営委員会を組織し、その論議のもとに、5 つの研究分野——1. 海域・海民史の総合的研究、2. 民具資料の文化資源化、3. 非文字資料（図像・身体技法・景観）の体系化、4. 映像資料の文化資源化、5. 常民文化資料共有化システムの開発——を設定し、応募条件をホームページ上に公開するなど広く年度ごとに公募を呼びかけ、プロジェクト型共同研究を進めることにしました。その結果、上記の 5 研究分野に応じ下記の 8 課題、

- 1 - 1 漁場利用の比較研究（研究代表者 田和 正孝）
- 1 - 2 日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究（研究代表者 伊藤 康宏）
- 1 - 3 環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究（研究代表者 後藤 明）
- 2 - 1 民具の名称に関する基礎的研究（研究代表者 神野 善治）
- 2 - 2 東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史（研究代表者 角南 聡一郎）
- 3 アジア祭祀芸能の比較研究（研究代表者 野村 伸一）
- 4 アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象（研究代表者 高城 玲）
- 5 第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学（研究代表者 泉水 英計）

が設定され、80 人余の共同研究者がつどうことになりました。研究代表者には神奈川大学以外に所属する最適任者が選任されましたが、4 と 5 は、日本常民文化研究所が所蔵する資料を直接扱い、諸権利関係も存在するため神奈川大学の教員が任じることになりました。

本書は、そのうちの、4「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」（研究代表者 高城 玲）班の研究成果報告書「論文編」となります。

本共同研究は、主に 1930 年代に渋沢敬三とアチックミュージアム同人らによって撮影された「アチックフィルム・写真」を研究対象として、第 1 には、映像資料の文化資源化／社会化の可能性を探るという課題、第 2 には、研究目的として（1）モノという物質文化の問題、（2）モノと人との関係性の問題、（3）異文化（自文化）表象の問題などを検討するという課題を念頭に置いて進めてきました。神奈川大学日本常民文化研究所には、貴重な動画フィルムや膨大な写真が所蔵

されており、第2の課題である「モノ・身体・表象」に関連する研究に着手するにあたって、その前段階として映像資料の整理とその文化資源化のための作業が不可欠でした。これまで、その学術的な価値が認められながらも、未だ資料整理の段階にあり、とりわけ、動画フィルムに関しては研究対象として正面から取り上げられることがほとんどありませんでした。

そこで、撮影地を限定して研究対象とすること、上映会を行い、現地の方々から当時の映像資料に関する情報を収集することなどの方針のもとに、資料の中から以下の二つを選定しています。一つは、1934年（昭和9年）5月にアチックミュージアムの調査団が現地踏査した「薩南十島調査」（現在の鹿児島県十島村）における口之島と中之島地域の映像を、パイロットケースとして分析を試みています。もう一つは、1937（昭和12）年に撮影された、台湾南部の山地に居住する「パイワン族」関連の映像資料です。現地調査では住民の方々の参加を得て上映会を行い、参加者からも貴重な新情報を提供していただくことになりました。こうして、映像資料を基軸にしてさまざまな情報を統合的に整理するという文化資源化の方法が有効であることを実証できました。

すでに、第1の課題に対する成果として、2013年度には「薩南十島調査」のアチックフィルム・写真の整理とその文化資源化を実現した『国際常民文化研究叢書8—アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象—[資料編]』を刊行しています。

本書は、上記二つの課題に対する成果として、これまでの研究調査を踏まえてまとめられた共同研究者、業務協力者、および調査協力者による「論文編」です。第1の課題である文化資源化／社会化の可能性を追求し、第2の課題である「モノ・身体・表象」に関連した個々の論稿により議論を発展させた内容となっています。また、上映会開催地の現地調査協力者からコメントをいただいているのも大きな特徴です。

この「資料編」と「論文編」を合わせた2冊は、今後、これらの資料を利用して研究を進めようとする多くの研究者の指針になるものと思われます。本書作成に関わられた方々に改めて謝意を表すとともに、読者におかれましては、引き続き国際常民文化研究機構の事業にご助言と、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2015年3月吉日

神奈川大学日本常民文化研究所長
国際常民文化研究機構運営委員長

田上 繁